

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
統合医療学寄附講座特任准教授
医師・医学博士 **狭間 研至**

第33回 医師と薬剤師の微妙な関係の理由とは

業務フローでも上流と下流の位置に？ 医師と薬剤師の関係を形づくる3つの理由

医師と薬剤師。この2つの医療専門職は、共に日本の医療を支える欠くべからざる存在です。しかし、日常的に連携を持ちながら活動するこの2つの関係に、少なからず微妙なものがあるのではないのでしょうか。その理由は、以下の3つに集約されると考えています。

1つ目は、医薬分業が進んだこの30年余りの中で、業務での関わりが劇的に変わったことです。医療機関が院外処方箋を発行するようになり、医師が発行した処方箋を薬剤師が受け取って調剤してお渡しするようになると、業務フロー上の上流と下流のような関係ができるようになりました。こうなると、薬剤師は処方箋が多く発行される医療機関の近くに薬局を出店ようになるのは当然ですし、上流の流れが止められると、下流は困ってしまいますから、医師と薬剤師の関係は自ずと上下関係のようなものになったのかもしれませんが。

2つ目は、医師と薬剤師の社会的な認知度や待遇の差です。一般の方に「医療における専門職は？」と聞いたとき、真っ先に挙がるのは医師で、その次は看護師であることが多く、薬剤師はそれほど認知度が高くありません。また、最近ではかなり事情は変わってきましたが、医師は弁護士と並んで高給の代表のように言われています。実際、勤務医の平均年収は、勤務薬剤師のそれを大きく上回っています。病気の診断や人の生死に関わる医師の仕事にそれなりの金銭的評価はあるべきだと思いますが、現在の薬剤師の仕事を考えてと少し低すぎる気もします。とはいえ、薬局経営をする立場からは、この待遇を現在の制度の中で改善することは難しいのも事実です。

そして3つ目は、大学受験における差です。個人的に偏差値というのは、参考程度のものだとは思いますが、その参考値においても、医師になるための医学

部と薬剤師になるための薬学部には、場合によっては少なからず上下関係が存在します。そのために、もともとは医師を目指していたけれども、学力的な問題もあって薬剤師になったという方が一部にはいるのも事実です。20歳前後の多感な時期に直面した学力の壁が影響して、多少なりとも薬剤師が医師に対して特別な感情を持つのも無理はないのかもしれませんが。

服用後のフォローを実践すれば “微妙な関係”は解消に向かう

異論はあると思いますが、これら3つの理由によって、薬剤師は医師の下にくる職種のように捉えられているのではないのでしょうか。そして、「疑義照会を受け入れてもらえない」「医師に嫌われると薬局が成り立たなくなる」などの日常業務での経験が、その考えを強固なものにしているのかもしれませんが。

しかし、薬剤師は医師の下なのかというと、そうではないと思います。現在の業務フローや社会的・経済的待遇、大学の難易度などに惑わされてはいけません。では、どうすれば良いのか？ 私は、薬剤師が薬を渡すまでだけではなく、服用した後もフォローすることが重要だと考えています。服用後もフォローすることは、薬という“モノ”をお渡しするのではなく、患者さんという“ヒト”の状態をよくする仕事になります。そして、患者さんの症状を改善させるための知識として、薬学部でしか学ばない薬理学・薬物動態学・製剤学といった専門性の高い事項が活かせるようになります。患者さんの症状改善に直結する医師も知らない薬学の情報を医師に伝えれば、医師と薬剤師の関係は劇的に改善し、微妙な関係も消えていくはずですよ。

医師と薬剤師の微妙な関係に直面したら、目の前の患者さんの服用後をフォローし、そのときに思いついたことを、医師に伝えてみてください。きっと新しい展開が開けると思いますよ。